

# ら は た 訪 探 歴 史 43 其の クラブ

TAHARA  
History Inquiry  
Club

日本の近代化を支えた  
田原のセメント産業

写真を見てください。なんだかわかりますか？ 蔓と草に覆われたレンガ積み塀のようなものが見えます。仮に「なぞの構築物」としておきましよう。見づらいますが、下方には半円の穴が二カ所あり、壊れた様がいっそう不思議さを増します。ここは豊島町の旧小野田セメントの敷地内にあるもので、セメント工場に関連するものであることがわかります。でしょう。

渥美半島には、石灰岩を産出する



全国に2カ所しかない徳利窯（写真は現存する窯の下部）

はセメントを焼く窯なのです。

さて、なぞの構築物の正体はセメントを焼く窯なのです。さて、なぞの構築物の正体はセメントを焼く窯なのです。

鉱山のあることが古くから知られており、元禄4年（1691）に田原藩が白谷村（現白谷町）庄屋に石灰製造を認可した記録があります。石灰は石灰岩を焼いたもので、建設、土壌改良など多種にわたる用途をもつものとして重宝されてきました。この豊富に産出される石灰岩、そして石灰製造の基盤をもとに、田原のセメント産業が成立したのでした。明治時代になると近代的設備の構築にセメントの需要が高まり、これまで高価な輸入に頼っていたもの

を、国産化する必要性が生じました。官営で生産が開始されたのは明治7年のことですが、技術が未熟で、運営も軌道に乗らなかつたようです。

愛知県においては、家禄を失った藩士の救済事業としてセメント製造を奨励し、明治15年、田原町二ツ坂（現在のJ A愛知みなみ畜産センター田原支所）に東洋組の名で工場を造りました。経営者は齋藤實義で、かの有名な遠山の金さんの孫にあたる人物です。その後、経営者の交代や経営危機を乗り越え、明治23年、

現在の豊島町に移転、明治24

年に三河セメント工場として再出発しました。その製造技術は最新のドイツ式であったといわれています。

明治40年の増築時のものと考えられ、構造的には堅窯で、その形態がお酒を入れる徳利に似ているため徳利窯と呼ばれていました。セメントは、石灰岩を焼いてできた生石灰に水を加え消石灰とし、これに粘土（当時は汐川の泥土）を加え乾燥させたうえで焼き、粉碎します。徳利窯はこの焼成作業に使ったものなのです。

このような明治時代のセメント窯は、小野田市と田原市の二カ所しかなく、全国的にも貴重なものです。

：つづく（増山）

生涯学習課 23局 3531



田原市のセメント産業発祥の地（田原町二ツ坂）